

西史
要傳

伊呂波文庫

二

~13

4307

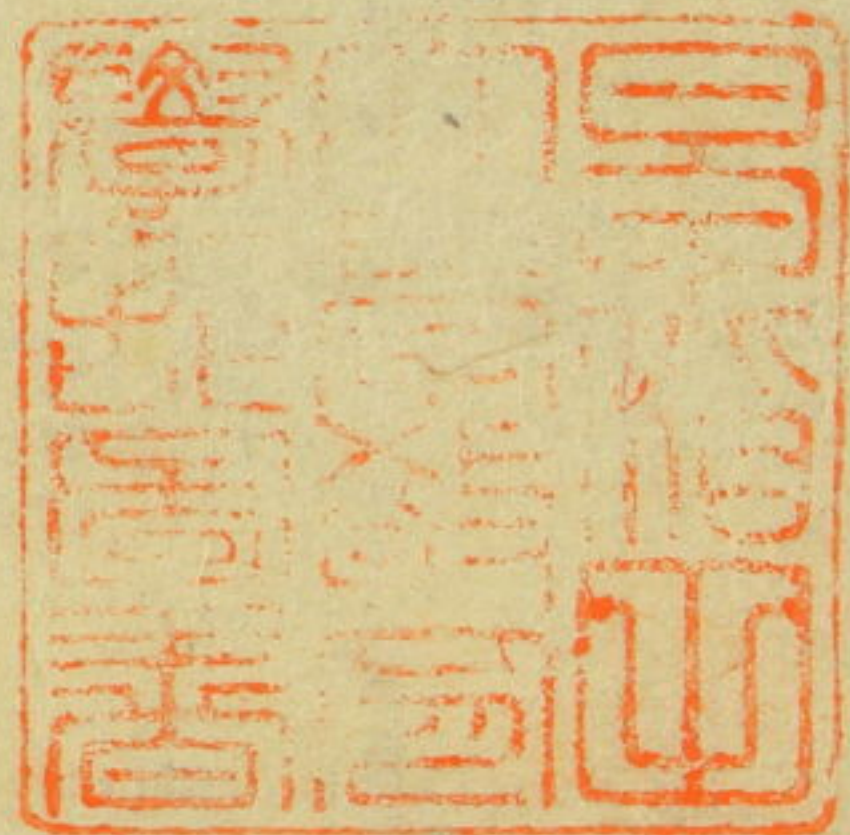
2

8
9
20

1
2
3
4
5
6
7
8
9
30
1
2
3
4
5
6
7
8

ハ13
4307
2

2
250
2



早稲田大學教育學部



16090

16090

<2000-332>

いゝは文庫第二編の序

忠臣義士の列傳を出る程の長物なり。

人情の字一々を思ふに、今得て讀史

實見傳、孝女、妙婦、是れ小兒の益

義我輩の爲、先我輩の爲、何れは文庫柱

真結る中、後の豊後の中、事あり

一、ちうちう 大なる事ことの美うつくしき事こと。女おんなの情なさけをこころにこめる
 事こと。一、あま 條じょう下げ結むすひの事こと。一、あま 樂がくをこころにこめせむ事こと。丹に心こころ
 と、あま 條じょう意い故こありの事こと。一、あま 教けう導どう才さい勸くわん懲ちやう未み毎まいル
あま 歌か恋こひと。文ぶんと、あま 拙せつと、あま 笑わらひと、あま 色いろ便べん言げんをこころにこめる事こと。
あま 一、あま 春はるの風かぜ洞どう洞どう女にょ。一、あま 鳥とりの情なさけをこころにこめる事こと。
あま 一、あま 春はるの鳥とりの情なさけをこころにこめる事こと。一、あま 唯ただ也なりと。

一、あま 春はるの鳥とりの情なさけをこころにこめる事こと。

あま 義ぎの美うつくしき事こと。一、あま 實じつの事こと。一、あま 甘あまい事こと。
あま 一、あま 天てん保ほ千せん己こ亥がい春はる如ごと月げつ吉きち辰ちん
あま 東とう都と人にん情なさけをこころにこめる事こと。一、あま 祖その事こと。
あま 一、あま 狂きやうの事こと。一、あま 狂きやうの事こと。
 為なる事こと。

關門突入茂荊鄉

易水風寒壯士情

炭啞形衰追豫讓

悲歌淚滴挽田橫

精誠貫日死何悔

義氣拔山生太輕

四十六人齊伏刃

上天無意佐忠貞

四十六人

淚飯親鄉去輕身

ノムクヲノムテニムケウチサリニナカルウニテ

右 意先碑 筋 玉

チウシツヲサキムスルハラワタヨクタイテケム

魄 森 隆 止 芳 松 禪

去 桑 香 傍 遠 居

峯 山 州 齋





同盟

義士の
親族の本望
達せしむるを告げしむ
良雄が指規に仍りて
後鎌倉小戻の義士と共に
死刑と望み執政助命せむ
刺髪して同盟の

菩提を吊らふ

奥女中
松島

部家方
女僕
木



塩谷高貞の後室
瑤心院

寺岡の後室の館
敵討の光景を
注進
直さる
都趣

足輕の組
寺岡
平右衛門

いろはに
ロニ

一文屋抱
柏木太夫



今猶存一談柄と
反問の奇謀英雄
人と欺と云つべし

赤城と退太一
都山科の居を占
酒色遊真を
非優
瀬川
竹之
たのと持
中止静ろんご其頃世の
聞えさう酒後の徒と
愛し放蕩不頼
比類多し就中浮瀬の
酒杯撞木町の落書



大星良雄



慈愛を以て女にあらねども
 復讐の後の幼児を
 罪を蒙るべきを知り
 妻子一世の別を
 思ふの程を
 正久の
 琴の妙なる
 夜討の
 琴氏に懐中
 優あやま
 うら

正久
 於妻
 松谷羊之丞
 政利



老を
 親の心身斯るものと
 志志金鐵の身
 御製を人の
 まく後尾院の
 我
 子
 の
 身

伊曾代十郎左門
 正久
 松種子

終つて
主君の
敵討つ
一世三度
撃古今志聞
個英雄



武康の堀内源三郎の門才
流の達人多し叔父の
高林軍兵衛と討高田の馬場
十五人と討取る
其後堀部の
家の智と
塩谷家の
小給仕

兵術指南
堀内源三郎
本名
堀部安平
武康

空太赤城窺敵郵
今宵誠及衆屯酬
生肯擔扇賣草孰
神與五郎獨則休
梓弓倭のふくま



則休

扇賣美作屋金平
本名
神崎矢五郎則休

阿房
則休



尾花
處女

復讐言とけ靈位小前不吉
詫言誠忠尤比類
不破名古屋草履打の狂言
此賣小の草履
檻觸と
もと
つろ

花井
三郎
女



狂言
以裁場の
刺世の噂と
憤りふ不堪
主家滅亡と聞
流浪して二君不仕
正種君の盛氣と蒙り
聞小及はさく
頭取
女三
郎と草履
打らんと
後殉先の一列ふかり

芝居
頭取

不破
勝右門
正種

英一業端

芳らうと云

種ありのや

雪の所

吳柳

炭らうらう

雪の海らう長のを

青栞

雪らうらう

雪らうらう

雪の所

青栞



雪の所

雪の所

雪の所

雪の所

雪の所

吳柳

雪の所

証史 いろはは文庫卷之四

江戸

狂訓亭主人著編



第七回

定示極谷の術後室美貞漸糸と園え一人判官切
復ありま一後安保ある此屋愛ふ徳香わらうらう
仙流と流を存て流室のきもく人一人き切城文も自然
ある慈の家も岡を移してのそ存せしぐえしかりめて
家老の大星由良と島桑上と中直直バ後室もそりま

あつらひしき西頼を後
つらうりし思ふ由良と助を
つらうりし通をさのふト作ふささの次より女中の室の
引込て入来る姿のあつらふ私をつらうりし上りも精の
因ぐも響の羽の目ふ立人用ひがゆふそれふの
眼をささめし一息を暫し固く入又後室より飛方を
あつらひし中実小頼と大星がけ及京都山科より
つらうりしつらうりしかの春の師直を討つて亡君の
手白んときるま候あつらんと世の中れ

北益を揚りて 後ハケ由良と助の退去の後山科と
中実小頼と大星と今度鎌倉へ入るあつらんと
所存があのてや 由が亡君の報書昌の代あつらんと遠
家の身の上鎌倉見おも自由あつらんとつらうりし身と
相ありつらうりし亡君の由良と助を何れもつらうりし
山科の樂浪居都の地ハる残存が一よりつらうりし
西海地の名所を家平大略見おもは案よりつらうりし
あつらひしつらうりし明日は足派あつらんとつらうりし
あつらひしつらうりしつらうりしつらうりしつらうりし

おぼろのまふれづあふぬをひまむましこつは後しふかまこ
一は幸もこころわなむおまをまをぐそれすでの山を後山機張
しるしふ山機張留をト町寧ふ言上あれば後宮の思案の
不相違ふしる大早か所存ふあきれて自の覺類依
亡者の山機張みせしるし師直せふ取思案もあつく
あけきふ身のともふ京鎌倉の見あむ任ふ浪人しる幸
といぬいしるの今の皇上君の存生の山田のまきしるの用ふ
才と作むしるしあがね遠ひ不安るもの後しこ

界一なる山田の又きとわ札ふあし一文章様を由ら
助ふお付とあふおしるきなまにうけしる後録の同情
申おむしりけしるまきしるの舞の志を頂戴か
まして眞云の愛山言書後そ何を由アイヤ七君同の
山田のりうふしんとすは何れをのまをまのまを
山田のあきれまきしる山機張とあしるはうの空海ら
るしる山田の言書すげふは後宮の思案のりる
入るしる山田の言書すげふは後宮の思案のりる

つらなるふむ申すやまきつるの只今世茶へさしよんと
ぞんじとされど先礼とぞんじおまきつるれは拙者かよふか
より東路入りし居の記すておとをそしと名所のよみま
古縁くせんう〜記〜とて末まきつるつら〜の思ひま
おも相する品あ〜明日中なる物に鎌倉きつるの後ど
あ〜く〜と思ひ見おまきつる旅を流所おまきつるの思ひ明お
おかしせ〜と申す〜因て末まきつるの思ひ〜の思ひ〜と
ものひ人あ〜んとと〜後の思ひ〜の思ひ〜申す〜と東

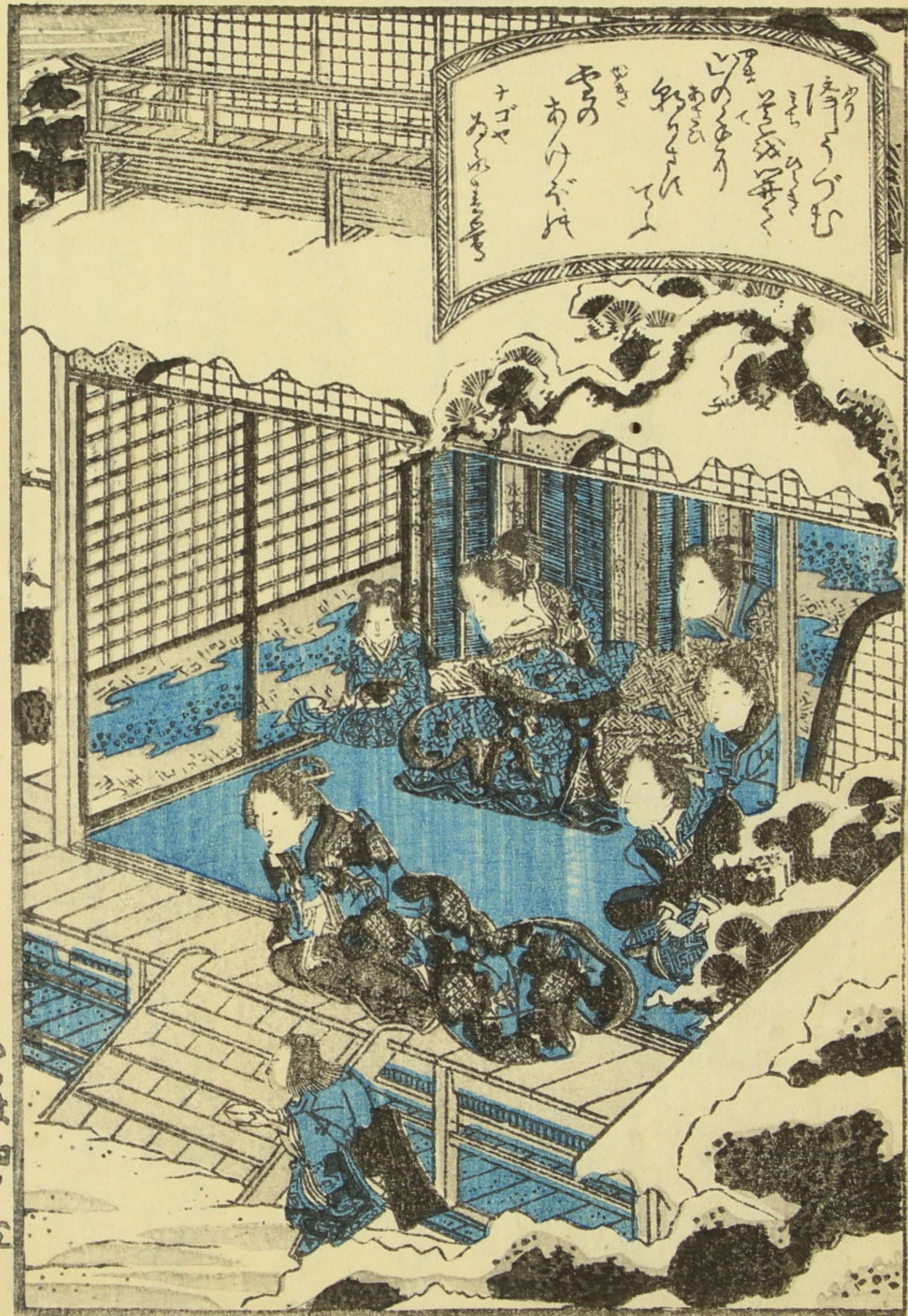
つらなるふむ申すやまきつるの只今世茶へさしよんと
ぞんじとされど先礼とぞんじおまきつるれは拙者かよふか
より東路入りし居の記すておとをそしと名所のよみま
古縁くせんう〜記〜とて末まきつるつら〜の思ひま
おも相する品あ〜明日中なる物に鎌倉きつるの後ど
あ〜く〜と思ひ見おまきつる旅を流所おまきつるの思ひ明お
おかしせ〜と申す〜因て末まきつるの思ひ〜の思ひ〜と
ものひ人あ〜んとと〜後の思ひ〜の思ひ〜申す〜と東

おこの事念々申公がよろこせし中良と申す末の事
後室さまの山之後それともおとや路の記とお説きの
ふりゆいふら〜
おふ殿さまの修羅の山云念後室さまの山修念所直
つとてあひらぬるのり惜しくと忠告の〜
芳を彼等の記と〜
何れのやの曲者より〜と都念の戸を明てあづふ
あのみ屋居る層本時時のあふ在ける射の杖と目か

けり書を本巻の〜見〜
宿るが都念方へ〜
廿七八の都念方者秋の益〜
及真の〜
あふ〜
ら〜の〜
ま〜



五泉
静齋
共
一
画



静齋
共
一
画
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた
あけがた

五泉
静齋
共
一
画

此封状と何のうらふ仇のり者をも動へ下三か
まぶ遅れぬ新と大橋の局をわかれど冥縁でねんま
利統とらてうまぶ振もひ封状のあつて今平
女のまげとまを迹まてまを清く 本橋の部金入曲
者が入まてお合まされ比留さんにお上の口用ひの
トの妻國と部金ぐよう表の方へ早次まて面へ
廊下をませと本橋の部金入まて居るまのうら
すくも鏡兒おまふおまの役人お押へて

四ノ六

かこむけるま圖小局の封状とひらまて清くけびつら
仲天 ヤミとんまう今夜忠義のくぐ高野の屋敷へ
お入とらそれともわらぬ余にくくいとぬをひま
累なは方とまてとまうし部金方者中野のまぬ仇の
用を何ともあれてア本橋へト衣箱をあうま
おろろ若る鶴の舞 本橋は直小まな成まて
跡くらの茶へちりとも入トのたれておのく
仁務ふらういそがさ 依本橋へ後室へお目見下

ちりびりゆきたる
たる中ふ東八代東の雲を人ききとる日雲の音しき
よたを屋づゝみの種類を山殿へのそぐき所へ長役人吹
まみて直ふお屋の切戸よりこへとせ来る山屋を依の
大早の下かとうけ 佐討場所よりそのまふよりこひ勇
早づひ居はこれと急度見と 寺園の
平のつがな
ちりびりゆきたる
より竹早抄 寺シラく首尾よく高世の縁へ せんく
用かまびしき高世師直うく 密書あふ人とのうらぬ

のうは四ノ七

所をみる万苦 去へ ちりびりゆきたる
向ふ様へと見入る所へ 後宮をやくもこれを園のひて
まがとみふと見入るも居は屋を見入る 去八ノ平
をいつの今の子をいぢくへ 平へぐくことまうまうと
おまのまはさても同盟四十九人 寐合をせんせだ
身とくちりちりる甲斐文ごうつて 略夜討利も子のま
別う 新地の 山屋を ちりびりゆきたる
まう二重にうらまのく ちりびりゆきたる 新存もま ちり

門を破り申入る用意とありし一由殿を去りて
急を告ぐるも入もつまじくはくもく道一が將の由
肯らつて義烈の勇は只今花み橋の東原小橋
み屯とらつて体置らうしつるも息あひせらるる
あまのこゝれは息あひさもけなげふも思はれ
後をさうしるも本清も歎きて侍もさうさびの
あまのこゝれもしけれ義貞由茶ハ本清の居たひ
口焼とて由のぞもうのみつ 後一くく本清
のうは四人

何とせう昭日見えらぬ由良と助の生れたと
いふがむそれともあまの節義あまの
むの仲にそつとつるの事うさ女のむの侍
よく言はれとてものもむせび言はれ

第八回

さて寺園平右衛門の夜更あまのこ
それハ後宮より女抱作侍とてあまのこ
うしるる所早利根も辰の母長方よりさう決て

去年以来城明らうの何れにして美のもの入書
 義士の手當 夜討の惣東 後の取つて
 金一 金一 九千両その
 透るぬらみの 明細書
 仙院 大早の
 金銀
 松の所
 已書 後家
 法

一ノ十
 三ノ四ノ十

入ることを 作ハ
 世に
 西美 藤の 二人
 信者 西美 藤の 二人
 組 佐守 山

よりとくさう苗めらば二百石賜り二百石不申
立ありしは二年目ふつうて伊勢番宮とわらふ
上京して山科ふつう屋敷材役人ふ新面裏て
ゆらゆら助が隠居のる月介ともふ寺西支記して
鎌倉入りし常も弥きまか立合申て苗も居一
人をあまき材役ふ頼もとのか系宮寺西支記
され、此度屋敷不徒合して由良の助の宅地面
すも不賣掛の唯一らる四方の地と誠一は年

貞の手當をり一草堂と建く大里の石字と
造る

忠誠院又空澤劔居士

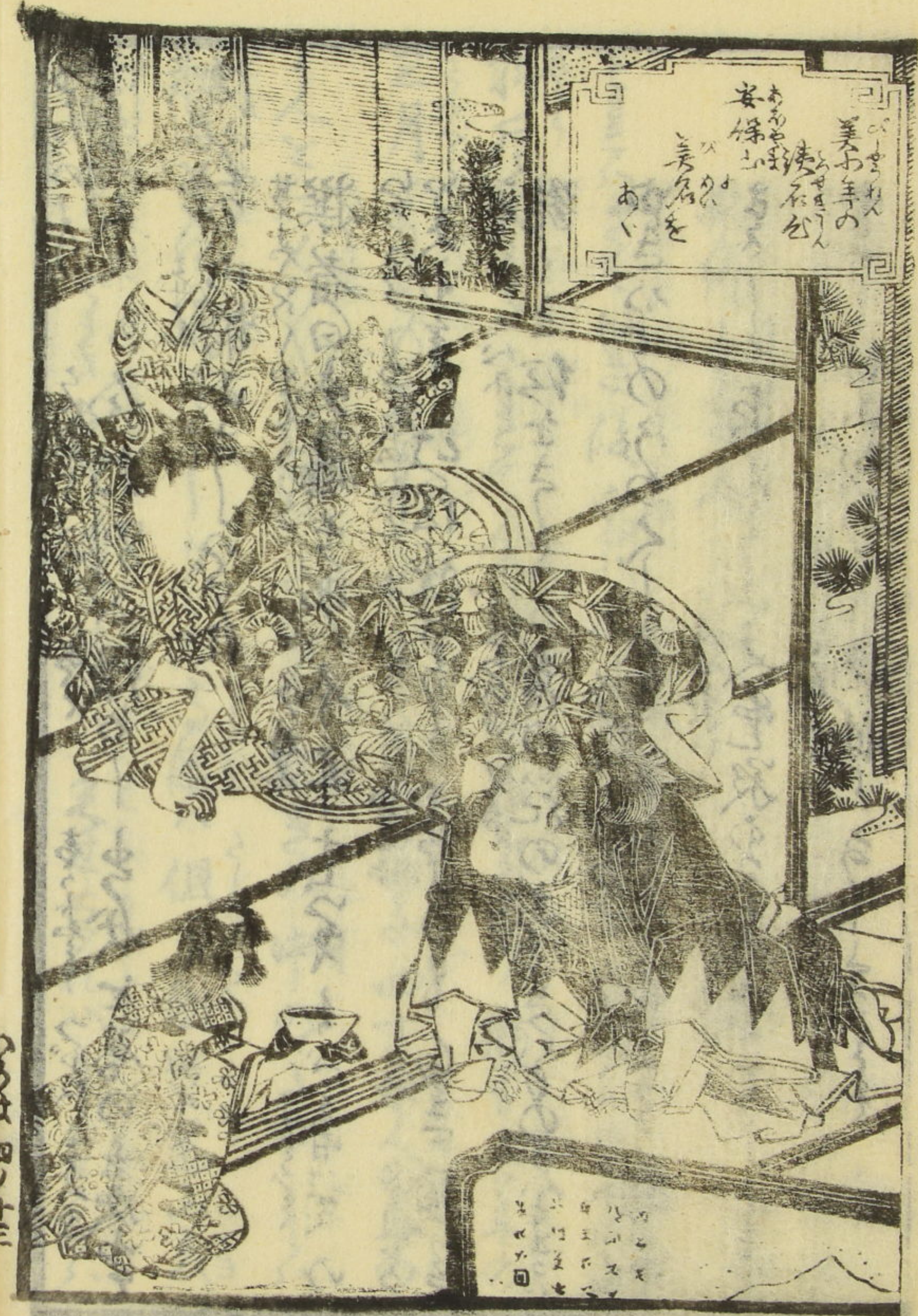
三月
と立流の彫刻をさせき後山科ふ一のり
男女の隔あく佳あわさる傍を頼み大法より成
つらめ料理を潤く救百人ふつらふひそく
保榮元年二月行年六十二才大里の石字の
の景そ美ふの不後を切く終りしきと鳴

大星が一人の忠義人としげふと奇西が忠死
始終全き人なり

三月よりこの暮までの辛苦の振子四十余人の身の
一人一人と同一とある歎きの中のよ
拙き事な述ごりくても國は但ら國豊と思ふ事
の用ありとておのれを預けまかせられ

ゆりのより
ゆまのゆり
後宮の山添ふさ

撰者白文藤も助の今年十一月
美水が辛 け程降る
驚くと紅をさ
ゆきかどのうら
まきくおん
やううーげふあ



美作の
安保
美名を
あ

そと 彼女みづかの 舞まと 如ごとく 世よに 傳たれと 傳たる

法はは 法はの 一いの 如ごとく あり

いん と あり 女めは 夫むを 慕こむ

名なは 軍いくさ余あまの 如ごとく あり

さう あり あり あり あり

いん と あり あり あり

いん と あり あり あり

いん と あり あり あり

いん と あり あり あり

いん と あり あり あり

いん と あり あり あり

ねのあや
扱さう

あざ
大い

まろしぬ
本づきのもの

後宮の... 園井...
せいのしき... 四千金...
らふ人...
女中遣後... くれど... 膝... 後...
あや... ちん... ちん... ちん... ちん...

神祇の... 霧... 長れ...
肉... 中... 再... 進...
あや... ちん... ちん... ちん... ちん...

新... 山... 用... 小... 山... 山...
兼... 大... 見... 進...
あや... ちん... ちん... ちん... ちん...

ゆーけき 山後目山苦勞のみぞんじまに只今あれ
より山使 今昔を伝へて 國覺寺へよめさせら
とも早く 雲 雲つらうのなごまのれど世書みせうせて大
りの山使 由良の勅 とも一周の着入のりーく
言外を別で 昭目のゆるなを大のそつていひておん
条略の伝方美の 龍言 雲 本細くしてまうして
もたまたまのれ 檢使 國覺寺へ 終少も物早も國の

雷一巻と一さんふ西のふより南の海まきまうて表行
借氏はまき巻の終ふゆてとくくあるは
次の物ぐるん安藤貞氏 傳ふくと又仇討うり
候よりまきて忠臣の終りう 順ふ終るは 後
ある一巻の例の 柱刺亭が 輝めて着官を
ともく 健徳ふさそらん 終りう とも 表
終る 終らるゝき 條はあはるゝ
正史實傳いろは 文庫卷之四

近日出版

金瓶

文治お伊達様

金龍山人 爲永春水撰

傾城高尾の十一代記古今あつて異説とあつた
諸書をもつて拾遺あり 在端より大澤をそそ
居ふるころてい潤をつまぎ坐敷で出あるまふ人様次
一統の人情本あり

全本五編 十五冊

正史
實傳

いろは文庫卷之五

江戸

狂訓亭主人著編

第九回

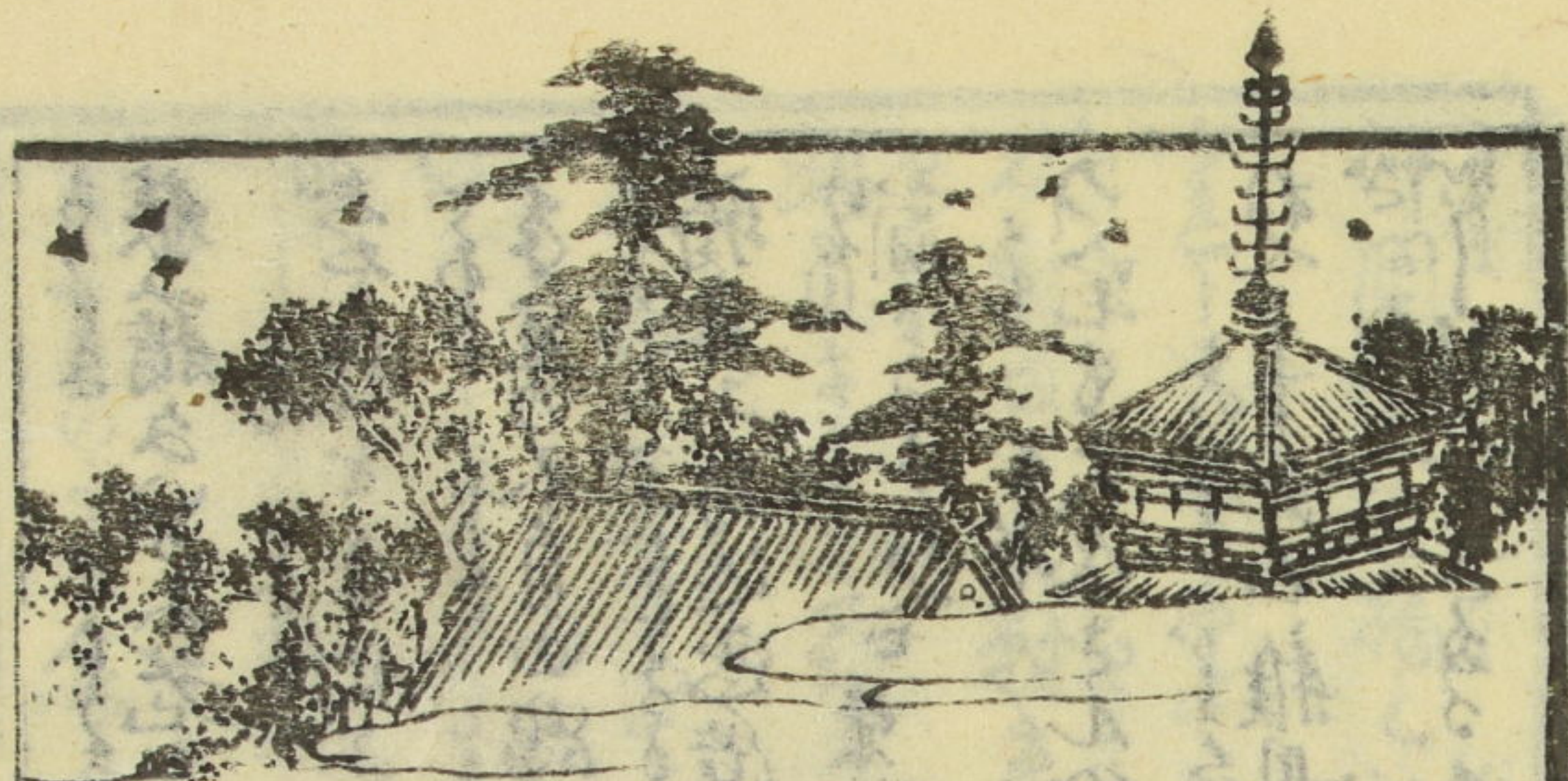
願以至功德鳥も得るに。あつたの甜鯛く小目が養を
とつけやしてよう大蛇とらりや中御堂の蝦土呂六尊の
降るゝも代も不助も体へ貴妙の毒指は間なく世を
あて開本する酒食の家のもまき申ふ猫も中へおぼせ
見世へうらまは 賑ひのうらまは 昼食時刻のともなれば系酒人

諸人の此家にはびて食をて潤へ休まふて在り入
来る人ふお寄るさあぐまのけるま津に七十七たろりの白
髪のお父十七来ぐまの美しき眼ともみお合のさあま
老父の眼を眼小窓ち 老父へ どの位何もおまて 跡くか
まのけ頼ぐお妻てうう老小角に他人のあまはらち
果の孫女のお方もお親も苦勞もおまらふこおまの
夜迹も圓のさぞお細くこまが位所でもうらまへるバ又仕合のま
あるまおまらふこまのあのお合へるまおまらふか何れ

思ふに何れのおもはま一やヨトはま力まを人の様言て孫
孫のお侍ていおまらへていおまらへていおまらへてい
さんおの細くおまらへていおまらへていおまらへてい
言ておまらへていおまらへていおまらへていおまらへてい
見ふにヨまのろりふお早人おまらへていおまらへていおまらへてい
さんおの細くおまらへていおまらへていおまらへていおまらへてい
眼ふまを細くおまらへていおまらへていおまらへていおまらへてい
百も直路おまらへていおまらへていおまらへていおまらへてい

たうらまうんぎう 淋しい面でもう久又支遣の元小逢達くうられハ
観音と公八月春の人の何れもあつううまふ付てなれハ
宿をふ一晚う二夜止宿がなれるのまト口もいどかあひ生れ
古々の繁花の地と放りてあまの足り居むと夢一つ竹田
我ふふあむ折くう表の方よりつうくと入事者い何せん
うらめしげき二人連一人の商人今一人の奉じ人の口入ともい
ぶいふ悪げの男老父と娘の例へたり ライ左のつらん終ふ
てあふ 中へトのうらめしき人へまるとせし 風情娘もこれい
あはまノ二

或魚もろし男あつう久又支遣の元小逢達くうられハ
久も見うけふよふ後大後人ど、そそきさげねてよう受なヨ
おりの公持で息子の借金かゝる娘はれが孫ごう孫
手に連くま違ふと言ごううが左様なきわんぞ、栄次がのガ
あつうふくも娘と連く孫はあまのまもあつうとわうさせ判
まとも娘をひ方へ清敷て、あつうとまが果のうけご、終法下て
男のみのうふ、左様サ、サ根又えん業がらう言ハ業かて女
と言ごうう果がさ存けあやア重れねヲイお住まんおのいん受ての

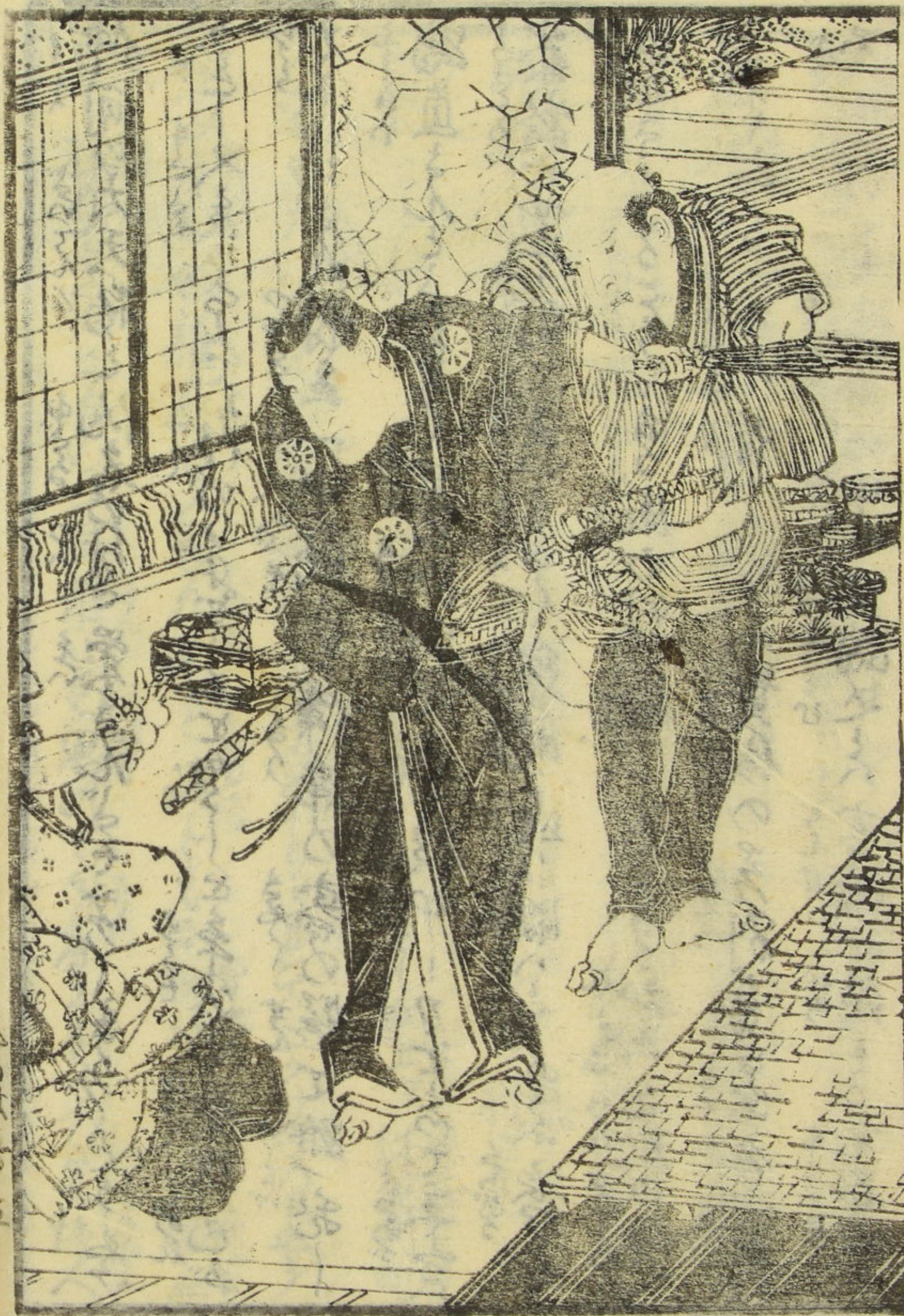


まつと八上り
 妻及返候のうらまは
 さんと言ひおぢやうと云はれり
 覺来るひ巾袖下やたたく一
 社して居てららちのわね人のでも
 け嬢と預るサキくまうり捨方がね
 位でも笑ひても用捨るさね
 ちんちの奴あてアト言つた位を
 ちんちを老父の押さて 老父

代料多組又さんと同念お性ゆの知来ねせ金の形
 不登候はらうり直下トまうり
 行といひまらぐは根りは根り有ませんト祖父の側へ勇を
 ろと宗次はせらり笑ひ 兼が 世話をせせねでまうりく
 トお位の手をとり引まると佐るつゝ笑とらひ 祖父の代小
 お位と兼おいさね老人と思つてる兼ふまうりたる片の
 借と金とらうりとも主後米と六岐ませね金澤の親類を
 都合の出る金のや彼地へまうりその御小居のてらる

狼藉なつゝ老義しくいつても昔の草のいづれに依るもの
おや孫をよむふとまきめりうと力身をまきてもむ人のまては惜し
ま皇の不自由踏むを孫のぶぶとくうつゝ風情の甲斐なれ
弱身ふ付込悪漢ども 三祖父どん左様まや 終つと不
簡なるもわんせ 兼三くわげまのいりまをまさんまモサ 江尾川町
の宅も大をさんの方へ在賢のまふくもして出づけのまや
ねえうまのの雜具もくまね兼くはくも小押付てうのし屋ま
おし接れてゐるものうに難くても思ひては毎にまらるゝのえ後人

仲間の大天揚と仇名付の榮まんごぞサくまらうくまらう
うまう又まうらうておはのませとらとまらうと榮次は己が
かふのぬされ射ま一守高なる澤席のまの膳と終つれ
踏直さんとらうらうく皇の宛所をまて投や一カはらうてまらう
兼終井四五女ふてまらうく皇の助通の眼はまらうくまらう
紅をまらうくまらうく威のくまらうくまらうくまらうくまらう
侍イヤあまのまらうく者らうくく貴族のまらうくまらうくまらうく
まらうくまらうくまらうくの中へ皇踏込くまらうくまらうくまらうく
まらうくまらうくまらうくまらうくまらうくまらうくまらうく



和しつゝ 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
のりり 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
任順さぐらぬ のりり 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
方どの 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
うらつて 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
是非とも 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
あつた 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
乳らしつゝ 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ

みとの 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
一言が 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
切小有らぬ 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
保借の 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
弟の 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
金も 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
いつせつ 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ
金も 妙にやうやく 免して 妙なるが け方の やりも 兼ぶ

乃らぬ金貨も代と清く栄次内か気味ころく
双あけしきふ引て金を清く後日まで遠論
燈文とこそしともく逃入る後また出ふ
家の行状と仁公のまきと感と合つて
倒の侍の意人ふあふ侍
女中我連てれて程けよ小川用公志のて
老父一 言ふ不思義なことを出さず
侍

お徳とやまぬ 可い電ふま有るふん
不形とてふん 當りての山狩
さそとりのと聞より娘いりく男振
有る途申さぬとて他人ふ三友
救ふ惜も直ふ別れて大ん
女ふあふ言ふくも階近
ふひれと祖父小舟の實と
侍

るわーか待は成て下すー實はねどもい今の方いふ
貴人いふと給ふも在行い引ひも存トまふ
君のお教では給と道れまふとふ田舎人あるや
ま甘ぬがまをいれまふ何所まもおおは成まふ
者い内用あつて本庄に中折まあるのちやが又と
いふまふら 若入い主い返一のら一かか娘と相
まふまふらいふ貴人のあまふ ためれいもまふ
と地まふらいふまふの所い侍いしつらぬれら
まふまふら

世話いふ左根を成を相付まれいおが給
極いおのまふら一庄は院門町い入のまふら
貴人若とも同なまふらいふ娘まのほまふら
縁の糸結ぶの糸の業まのららら侍とまふら

第十回

とまふら不動の門系あるまは是世あて老人と娘と
あまふらい侍い何人まふらと尋らふとれもまふら
大軍の内意とまふら城内を明退く間もあふら
あまふら

つるふ東の... 根室の... 方ゆく安藤... 町里を... けり... ぢき借取...

この... 借取... 借取... 借取... 借取... 借取... 借取...

ちよ十郎ハ金二おとらへん銀もなれどおん
十一おん一お茶が祖入さんと孝行おまの
不眠さう私の才志どうも買のめもさるべ
細く祖父さんゆも安堵をせやせ入して
あくは仕事でお出を成らうぞんども
むろこから何ぞ取遣は仕事があつたの
西門の娘ハ年もゆねがわつらん
すべし祖父さんハけさまで仕事入して
おん一お茶が祖入さんと孝行おまの
不眠さう私の才志どうも買のめもさるべ
細く祖父さんゆも安堵をせやせ入して
あくは仕事でお出を成らうぞんども
むろこから何ぞ取遣は仕事があつたの
西門の娘ハ年もゆねがわつらん
すべし祖父さんハけさまで仕事入して

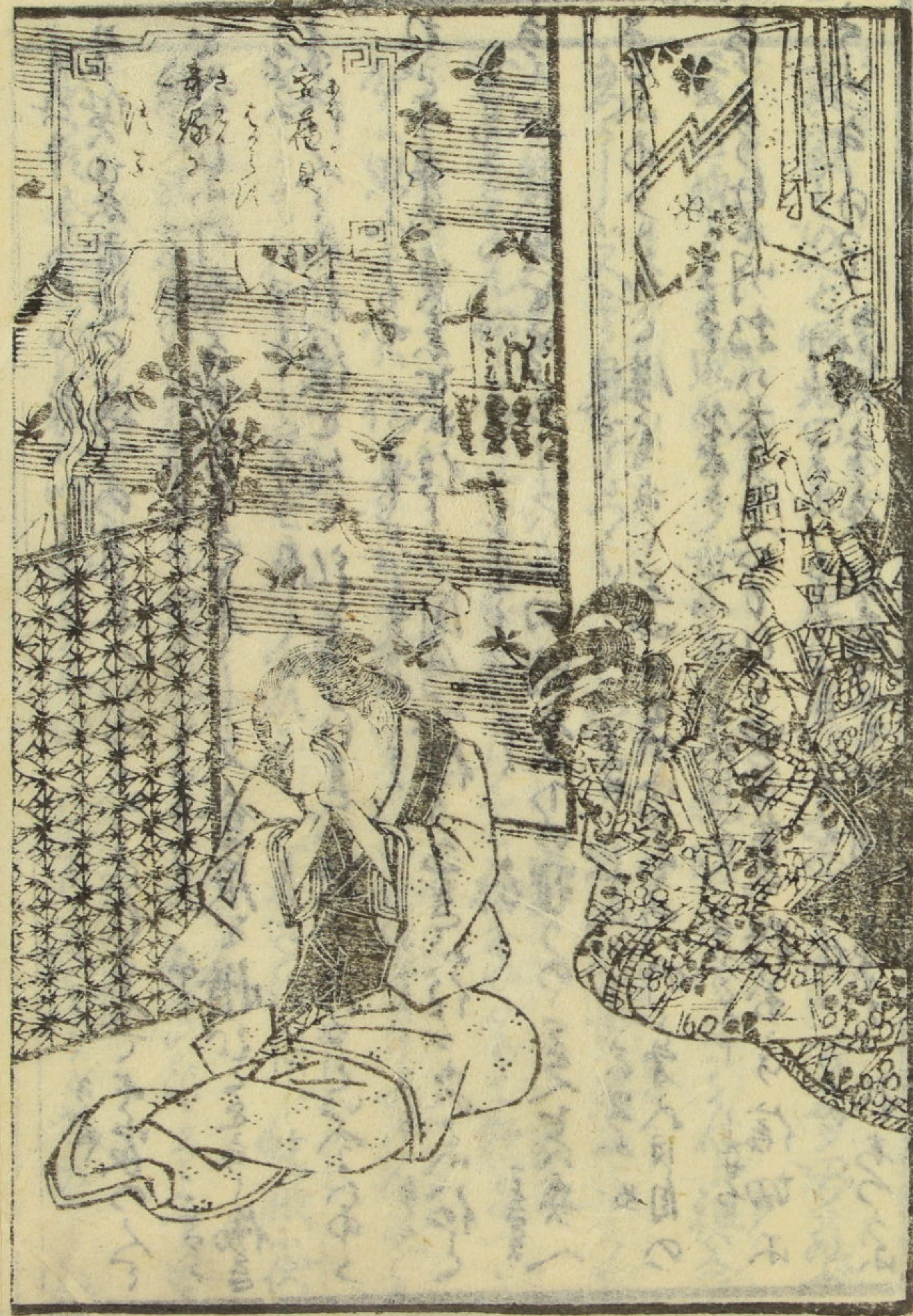
おん一お茶

おん一お茶が祖入さんと孝行おまの
不眠さう私の才志どうも買のめもさるべ
細く祖父さんゆも安堵をせやせ入して
あくは仕事でお出を成らうぞんども
むろこから何ぞ取遣は仕事があつたの
西門の娘ハ年もゆねがわつらん
すべし祖父さんハけさまで仕事入して
おん一お茶が祖入さんと孝行おまの
不眠さう私の才志どうも買のめもさるべ
細く祖父さんゆも安堵をせやせ入して
あくは仕事でお出を成らうぞんども
むろこから何ぞ取遣は仕事があつたの
西門の娘ハ年もゆねがわつらん
すべし祖父さんハけさまで仕事入して

おん一お茶

ら... 三月大夏の... 孫の代... 安孫貝... 十... 十四... 終日... 感... 終日... 感...

け... 月雨の... 今... 大... 終日... 感... 終日... 感...

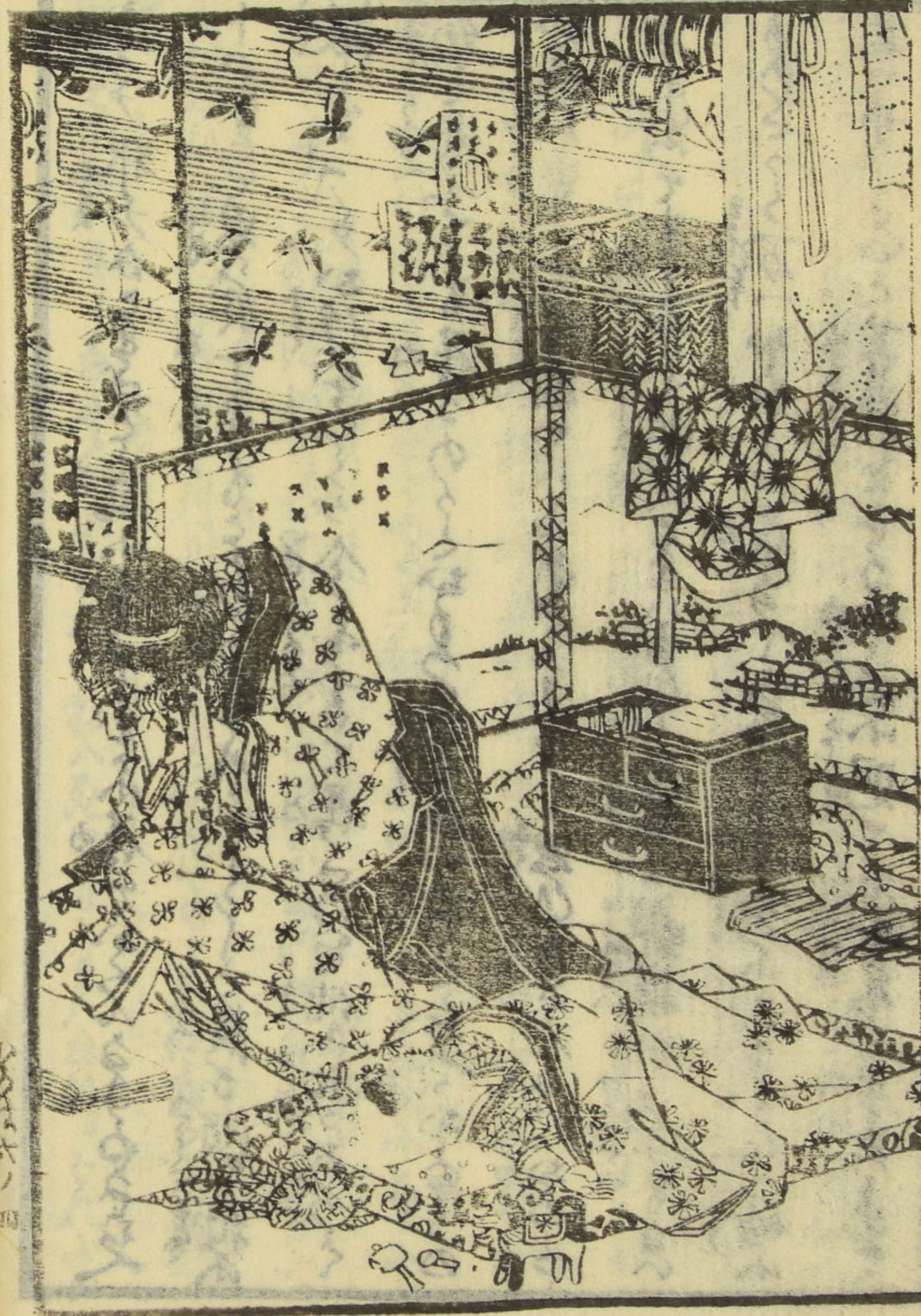


生保の世に於ての...
と想ふに丁寧の...
多分人の...
おと十帯の...
お接待...
あつた...
さう...
あつた...
さう...
あつた...
さう...

裏家とて...
愛亡...
あつた...
世に...
あつた...
あつた...
あつた...
あつた...
あつた...
あつた...

か方を近所ぞん敷きの中のほびぢもの養ひの御合ころ
 又婦中のと膝しよむのひまのちひとぐくしん
 及御とわぬく人へ嫁が御母もけねが御るひゆふに
 御へ得れしむらいたしう世多人へいと言決りし
 ありと思ひ深るけあふは御母もけねのひまのちひとぐくしん
 申すのろくそくしんおの敷きむしおは御れは御
 神ふろくして伏せむと十奉へ抱起し
 仁徳しんふたふたむらうのく入ぬしんを御ひと
 〇五十五

左様はそとえんひにけられん御の身と違者おのり
 親達の思ふよきのが才一の考りごま御小敷ひて大御
 御母もけねのひまのちひとぐくしん
 御へ有ごふごん
 御母もけねのひまのちひとぐくしん
 御の御ひまのちひとぐくしん
 御母もけねのひまのちひとぐくしん
 御母もけねのひまのちひとぐくしん
 御母もけねのひまのちひとぐくしん
 御母もけねのひまのちひとぐくしん
 御母もけねのひまのちひとぐくしん



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, with several lines of text. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page. There are some small annotations or corrections written in a different script or style, possibly indicating specific parts of the text.

Handwritten text in a cursive script, similar to the right page. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page. There are some small annotations or corrections written in a different script or style, possibly indicating specific parts of the text.

きりふくちも高懸きひより松のちみかひはあまらちも別

はくちあひの切會んと五月とあひの徳たから言語

コソお位はさうさきとぞふと思ふいCallismへ

を工十ノニサ他とすべしあがま折入せてまわいければさ

本月のまゝの徳がノトSawallひのりまのあやあや夜間

ららち一坊一多き一親とまんのあふちSawall一小池と

十番ふれきり一ササ又とさふのまふたふた

せいめんをさのまのふト給うさかこ

和歌六八六

かえ兄十ノ一お夜その松不言消しふのせや入

月六様まゝのあまの徳あはむをまのあが

まゝいふのりから

まゝいふのりから

連てほてあを

ねのともな

よれが

小池と二人と結を

これ以上
是限で完らざるのみならず、
其の料のお茶の情捨る女へ十分の手当をしてお呉らるる
のさう根さうもさひくれど、
お茶さんお逢入のひとけ申さるるあつきのふ邪鬼おどしを
おくれさう思ひ切らさるるも、
思はてお入けを申さるるさう、
一 おいそれとれたさうのものと、
出来さうさう放し捨とお入のお茶を、

おもさるるうと、
申さるるお入の情を、
小鬼お入の情を、
ふりお入生ごまのね、
うのゆある捨るうと、
大子の本を今、
よれお入の本を、
棄やると捨て、

居れど經之もお侍の數もふ安藤貞の傍とてくくもふ
齒と喰ひあがる男は親子の別れと奔へるも小兒も
のかくせや乳房をたまりて母の良あつてあつて泣く
声も哀れをよまする涙の雨の河を月ひきまら女も
鐘も淋もあつて一言ひていひせりて一言ひていひ
ふさるせごのりつてもねくもりのひの山出せりて
里とひ女が旗へまらふもいもいもいもいもいもいも
が川のまふまふ松の終へはほも思ひあはせり

六ノ九

第十二回

人の心の持ちなる安藤貞の侍の忠貞のついでに
ある故人今人變ひまきのまご終をまふも説後輯はむて
よく公烈の感懐をそへて一同じ忠義のまじりて
半と忠とのふ人のり仇討の折第一行年四十又さうが
代人の區谷家を浪人して町家小僧より十年の余りはれ
ども古この大變をゆりて忽ち鎌倉の家財持具を
みゆりて人の國元へ奔るる元老大星は良も助も對面を

終城たるも他と射もまじくは流るんと頼ひけりて
けし谷半と忠政利がかり忠義の人さるふ何の浪人そ
あしぞとくうま由をたれはうさ者の意仁をうけりて
尾小あをひそめふ海谷家やま選録念ふ信居らちの
婚を因ら他家の家中の者ふして極善の家中に於る者
とのみ者の方へ養ふふはあしうか養父ハ入丁金支うて二十ふ
後妻せりち半と忠ハ彼養母と同年とあものうさうが
年うもさるうふ若き宮藤野て殊ふ若代の養父のう

されば養父のちねふようく別後まお復れ出されが
ある赤世の宿業や運致あるの出来してまをりて
亡令残ありつるそのゆあ養母か懸とり者生母の産女
はく受半をの老人とと極ひ養父半と忠の義母ありて
のやうにまに知とらうと折これとものつせも養父半
言葉とくけり隔し律を撰くうさんとの慈悲ある人
思入のうく母親をたえ大なる不孝のせうして或何のう



六十一

情しとくゝ宛々としてあつたのさしはせぬに二十ふ道ゆれども
他様ふたつり身を入りてみごとく上つてゐる。悪女様ふたつり
衣袴も着て帯もあやうり解あて居居候ふ。紅の湯
具を白雪の机あちうめ。船那の風信男のこゝろあつた
善悪もさうぬくさうぬくまじと半々思ふ思ひもさう
向後氏まで判らう。さうのまじさう山城にた淵友あつた
さうのまじさうとらうとらうて来じま。下まをた駈かう。さう
さうにほ輝さうとらうとらう。さうのまじさう。

情しとくゝ宛々としてあつたのさしはせぬに二十ふ道ゆれども
他様ふたつり身を入りてみごとく上つてゐる。悪女様ふたつり
衣袴も着て帯もあやうり解あて居居候ふ。紅の湯
具を白雪の机あちうめ。船那の風信男のこゝろあつた
善悪もさうぬくさうぬくまじと半々思ふ思ひもさう
向後氏まで判らう。さうのまじさう山城にた淵友あつた
さうのまじさうとらうとらうて来じま。下まをた駈かう。さう
さうにほ輝さうとらうとらう。さうのまじさう。

むしと知りたてりてはなれども...
 成程の事と...
 親の事...
 悪人...
 死んでも...

一六六

地獄の事...
 親の事...
 世の事...
 世の事...
 世の事...
 世の事...

江戸

狂訓亭

爲永春水撰

江戸

一筆菴

溪齋英泉画

正史
實傳

い方は文庫

三編 四編
五編 六編

續
發行

江戸文澤堂

丁子屋平兵衛

全志書林

江戸連玉堂

加賀屋源助

大坂群玉堂

河内屋茂兵衛

江戸六人

